

Rustichello da Pisa *Meliadus*

ルスティケッロ・ダ・ピーサ

『メリアドゥス』（抄）¹⁾

高田英樹 訳



図 1 BNF Fr.1463, f.1r (最初のページ)

左上ルスティケッロの肖像

< 1 > /lra/ 帝に王、君に公、伯に男、騎士、陪臣に紳士の殿方、その物語を楽しむ才をお持ちこの世の御方は誰あれ、これを手に取って隅から隅まで読ませて下され、さすればそこに、ウーテル・パンドラゴン王の時よりこの方、その息アルトゥ王と円卓の仲間たちの時に至るまで、遍歴の騎士たちの間で繰り広げられたる大いなる冒険を全てご覧になるでありません。 ¹⁾

この物語は、イギリス王オドアール卿が、我らが主なる神に仕えて聖墓の征服に海の彼方のお渡りになったおりに、その書物から訳されたものであることをとくにご存じありたい。上にその像の描かれてあるルスティショー・ド・ピズ師がこの物語を編んだ、すなわち、その書に見られた全てのいとも驚くべき話とすべての大いなる冒険を訳したのである。また、世界の全ての大冒険をごく掻い摘んで語るであろう。しかし、他の誰よりもラックのランスロ卿とレオノワのトリスタン卿についてより多く語るであろう。何故とならば、彼らは疑いもなくその頃地上におわした最高の騎士だったからである。で、師はこれら二人について、他のいかなる書にも書かれていない、彼らの間であった多くのことと多くの戦いについて語るであろう。師は、それらがイギリス王の書に書かれてあるのを /lrb/ 見出し出したのだから。

しかし師は、何よりも前に、ログレスとブルターニュの君主アルトゥ王のカμμαロットの宮廷で起こった、さるいとも大なる冒険を置くであろう。

ここに始まる、老騎士の偉大なる騎士道、いかにアルトゥ王の宮廷に遣って来たか。

< 2 > この部分で物語は言う、本当の歴史が証言するごとく、アルトゥ王はたくさんの王や諸侯の一団とともにカマアロットにあった。そして本当にご存じありたい、その時、多くの勇士たち、ま

さしく円卓の全ての仲間たちがいたことを。ここにそのいく人かの名を挙げよう。

< 3 > さてもご存じありたい、カラドス王、イルランドの王、その名はヨン、マルシュ海峡の王、ノルガレスの王、ノルベランドの彼ら、ガロンヌはマルシュの彼方の王、フランク人の王、その他14人もの王がいた。さらに、ラックのランスロ卿、レオノワのトリスタン殿、ガウェイン卿、アルトゥス王の甥、強力な異教徒の騎士パラミデス卿、そしてガッレスのラモラ卿がいた。その他多くの勇士がいて、しかるべく盛大な祝いを催していた。知り給え、その日はペンテコステの日だったからである。

王と諸侯、騎士たちが食べ終わり、テーブルが片付けられ、彼らが手を洗った時、と宮殿の前に、すっかり武具に身を固めた一人の騎士が現れた。ご承知ありたい、その体軀はとても大きかったのも、/lva/巨人と言ってもいいほどだった。騎士は、とても華やかに着飾った一人の貴婦人を連れていたが、どのような述べよう。本当にご存じありたい、その女性は豪華な金の錦を身にまとい、頭には金と宝石の冠を戴いていた。そして、美しい乗用馬に乗り、馬は美しい紅のサマイトで脚が膝まで覆われていた。女性はこの世のものとは見えず、まるで精霊のようであった。騎士はまた三人の従者を連れ、一人は彼の盾、もう一人は兜、三人目は槍を持っていた。



Source gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France

図 2 BNF Fr.340, f.1r (最初のページ)

[中略]

しかしここで師は、ブラノル・リ・ブルン卿について語るのを止め、彼については本書ではもう話さず、ルスティショー師は、この世の全ての優れた騎士たちの冒険で本書を編むことに戻りたい。で、なによりもまず、ラックのランスロ卿とレオノワのメリアドゥス王の息トリスタン卿との間にあった憎しみと闘いのことを述べるであろう。

トリスタン卿とパラミデス卿は、いかに激しく戦い合ったか。

<40> さて物語は言う、レオノワのメリアドゥス王の息トリスタンは、初めてログレス王国にやって来た。それは白き手のイズーを妻にしたその年のことであった。彼は、ログレス王国で一番大きかった森を馬で行き、そこでどの日もよく冒険に遭遇した。がトリスタン卿は、その日はずっと冒険も男も女も宿も家も出会うことなく、馬を進めていた。夜になってもう道がわからなくなった時、とても綺麗な木々の間で馬を下り、馬から轡と鞍を外し、草を食みに行かせた。そして自分の鎧と剣を外し、盾の上に横になって眠った。

その後さほど経たぬうちに、いとも優れた騎士パラミデスがそこにやって来、トリスタン卿のすぐ近くで馬を下りたのだが、彼が目に入ることも気付くこともなかった。兜と盾を外し、鞍と轡を馬から外して、草を食みに行かせ、眠ろうと盾の上に身を横たえた。ご存じありがたいが、トリスタン卿とパラミデス卿の間には、コルノワイユのイズー王妃のことで大きな憎しみがあった。その憎しみは、イズー王妃がまだ乙女だった時にイスランドで始まったのだった。

パラミデス卿は、盾の上に横になっても眠れず、すぐに身を起こして恋の嘆きをととても激しく漏らし始めたので、トリスタン卿は目

を覚ました。パラミデス卿は、その嘆きを次のように漏らした、「アイー、パラミデス」と彼は言った、「何とお前はこの世で一番不幸な騎士であることか、この世の花とバラを愛しながら、虚しくでなければ決してそれを手にすることはできないのだから。アア、貴婦人。私がそなたを初めて目にしたのは、何と悪い刻だったか。アイー、イズー様、気高く優しき王妃、善と智と徳でこの世の全ての婦人に優るお方。アイー、美の泉、それがために私はたくさんの騎士道事を行い、それがゆえにたくさんの騎士を敗った。どうして私をお忘れになった？ 何ゆえ私はそなたからわずかな慰めも戴けぬ？ トリスタン卿のごとくそなたの騎士であったなら！ 神は、私がラックのランスロ卿やレオノワのトリスタン卿やこの世の全ての騎士を打倒せぬ限り、武器を持つことを許されまい。アア、トリスタンが生まれた日は悪かった、お前は私が最も愛する女王を奪い去ったのだから、お前は毎日善と喜びを手にし、私は悪く苦しんでいるのだから。

パラミデス卿は、こうして大きな嘆きと怒りを長く漏らしていた。その嘆きをひとしきり洩らすと、口を閉じてもう何も言わなかった。と、さほど経たぬうちに、再び嘆きを始め、前よりも大きな嘆きを漏らした。その夜じゅうずっとそのようにして過ごし、一時間は黙り、一時間は嘆きの内に過ごした。で、トリスタン卿は、パラミデス卿が言ったことをすっかり耳にして、ひどく苛立った、その嘆きに死にそうだったし、その夜ずっと眠ることも休むこともできなかったからである。で、パラミデスを悪しき死に目に逢わさねば、決して武器を携えることはないと自らに言った。このようにして彼らは、朝まで過ごした。



図 3 樹の下のトリスタン（左）とパラミデス（右）

(Fr. 1463, f.16v)

<41> 朝がくると、パラミデス卿はすっかり武装しているトリスタン卿を見た。彼は、その夜ずっととても近くにいたので、そのことでとても怒った。自分が言ったことを彼が全て聞いた、と確信したからである。で、彼は尋ねて言った、「騎士殿、夜じゅう私の後ろでこれほど静かにしていたそなたは、誰方なりしや」。「廷臣殿」と彼は言った、「私はそなたの敵トリスタンなることを確とご存知ありたい、そなたの言ったことを聞いたことをそなたに高いものにつかせよう」。「アイー、トリスタン」とパラミデスは言った、「余はそなたに戦いの他には求めぬ」。「ならばすぐにも試そうではないか」とトリスタン卿は言った。

で、何を言おうか。騎士たちはぐずぐずすることはなかった、馬を取り、鞍と轡を置き、頭に兜をかぶり、出来得るかぎりよく支度した。そして馬にまたがり、そこから近くにあった小さな草原に向かった。そうして遅滞することなく互いに遠ざかり、槍を下げ、馬に拍車をかけ、馬から引き出せる限り互いに相手に向かって来た。全力で盾を突き、激しさのあまり双方とも槍が折れて飛んだ。槍が折れた後は、盾と体にかくも激しくぶつけ合ったので、双方とも地面に落ち、まわりが夜か昼かわからぬほどであった。主人から解放された馬は、あちらこちらと逃げ回った。

騎士たちは長く地上に留まっていたが、ふらふらと立ち上がり、まるで大地が自分たちの下で震えているかのように、よろめきながら立ち上がった。その後、彼らが再び精と力を取り戻すのにさほどかからない。何らためらうことなく、盾を前に構え、剣を手に取り、一方が他方にとっても激しく突進し、剣で切り付けてとても大きな打撃を見舞い、かくていとも熾烈で最悪の闘いが始まる。もはや容赦することなく、死すべき敵であることを充分に示す。大きな打撃を与え受けることが見られ、どちらもよく持ち堪え、その力をよく見せる。二人の行いを目にした者は、ただ二人ともこの世の最高の騎

士であると言うことができただろう。さらに何を言おうか。互いにとても激しく突進し、互いに突進したので、互いに大きく弄ぶことはできない。その闘いを眺めることは、とても残酷で無慈悲なこと、トリスタン卿が彼に大きな一撃を与えると、パラミデス卿も決して容赦せず、かくしてトリスタン卿は、パラミデス卿はこの世で最強の騎士の一人であると自らに言わざるを得なかった。パラミデス卿も、彼について全く同じことを言う。彼らは、最初の攻撃にとってもかかったもので、もはや前に進めることができない、互いにとても打ち合い突進したので、二人とも死ななかつたのは大変なことであつた。互いに相手を倒そうと大いに努めたので、息と力を取り戻すために休戦しようとする余裕はなかつた。

<42> お聞きになったようにして、彼らがかくも精根を使い果たしていると、とそこへ、冒険のお好みどおりに、盾と槍を持った二人の盾持ちを引き連れた一人の騎士がやって来た。その騎士とは誰かと誰方かがお尋ねになるならば、それはラックの息ブランデリス殿だつたと言おう。

彼は二人のところに遣つて来、もはやそれ以上続けられぬほどになっているにもかかわらず、彼らが止めようしないのを見ると、大きな憐れみを覚えて言った、「騎士殿、そなたらが誰方なりや、またそなたらの憎しみの理由を、私に言つてくださるようお願いする。そなたらはこの戦いを果てまで続けようとなさつていとお見受けする故」。トリスタン卿とパラミデス卿は、ブランデリス卿が言ったことに何も答えず、前よりもさらに激しく戦ひ合った。

ブランデリス殿は、彼らが無も答えないのを見て、それ以上遅滞することなく、すぐに馬に乗つて二人の間に分け入つた。「騎士殿」とトリスタン卿は言つた、「無礼なことをなさる、我らの許しなく戦いを邪魔するとは、我らが戦いを終りまで続けるようこのままにしておいてもらいたい」、パラミデス卿もすっかり同じことを言つた。ブランデリス殿はどちらにも乞ひ願ひ、彼らが止めるよう大いに言ひまた行動した。さらに彼らに言つた、「騎士殿、そなたらの憎しみ

の理由を知ることはいか。もし私にできるならば、そなたらの間に平和をもたらしたいのだが」。自分が耳にした彼の言ったことでパラミデス卿に対して大きな憎しみを抱いていたトリスタン卿は、真っ先にブランデリス殿に答えて言った、「貴殿、我らの憎しみは、死でなければ誰も平和をもたらすことができないような理由によるものだ。その理由をそなたは知ることができぬし、どんなことも無駄なのだから、これで満足してもらいたい」。パラミデス卿も、トリスタン卿が言ったことに全く同意し、ブランデリス殿にすっかり同じように答えた。彼らの間に平和をもたらすことができないのを見て、ブランデリス殿は彼らに言った、「騎士殿、騎士の愛と名誉のためにお願いする、今日この日はもう戦わぬことを私に約束して戴きたい」。ブランデリス殿はとても乞い願い、彼らに言ったので、彼らはその日はもう戦わぬと約束した。で、ブランデリス殿は彼らのところから去ったのだが、武装していたからそれがパラミデス卿であることも、出会ったこともなかったからそれがトリスタン卿であることも、彼には分からなかった。

ブランデリス殿が立ち去ると、パラミデス卿が言葉を取って言った、「トリスタン殿、死でなければ誰も我らの間に平和をもたらすことはできないと、そなたの口そのものから言うのを聞いた」。「そうだ、間違いなく」、とトリスタン卿は言った。「ならば、さらにやろう」とパラミデス卿は言った、「我らが見出しうる最も人里離れた場所で一戦交えることにしようではないか、そこに我らだけが行こう。そして、我らの一人が、あるいはひょっとして二人とも死ぬまで、我らの戦いを終わるまで続けよう、そうすれば我らの憎しみと恨みと怒りは終わるだろう」。「貴殿」とトリスタン卿は言った、「望むところ、がそなた、私よりもこの国によくいらしておられるゆえ、誰もいぬ人里離れた場所を私よりもよく御存じであろうとて、言ってお下され」。「もちろん」とパラミデス卿は言った、「ペロン・マーリンが、ロクレス王国中で一番誰もいぬ人里離れた場所であることを、私はすっかり存じておる。そこで、我らは誰も知らぬように、我ら

のことをすっかりなすことができる」。「その場所が結構だ」とトリスタン卿は言った、「人里離れたところとしてかつて耳にしたことがある故」。

<43> で、ペロン・マーリンでの戦いを約束し、日を決め、そのことを男にも女にも知らせないことを互いに誓い合った。そのことに双方ともよく同意し、決められた日の朝ペロン・マーリンに来るであろうと、それぞれ言った。お聞きになったようにして、トリスタン卿とパラミデス卿との間でのペロン・マーリンの戦いが約束された。

で、互いに別れた。トリスタン殿は、別の時に身を寄せたことのある修道院に泊りに行き、パラミデス卿は叔母のところに行き、よくもてなされた。こうして決められた日を待って滞在している間、二人の騎士はどちらもペロン・マーリンから 5 リーグのところにあった。トリスタン殿は、助修士からペロン・マーリンを教えてもらい、そこに何度も行った。

パラミデス卿とレオノワのトリスタン卿との間であったペロン・マーリンの大きな戦いを述べる。

<44> 戦いがあると決められた日が来ると、トリスタン卿は朝早く起き、造物主に対して罪を感じていたことを全て司祭に告白し、それから聖霊のミサを聞きに行った。その後自分の宿に戻り、でき得るかぎりよく武装し、死すべき戦いに必要なものを全てよく支度した。そして馬に乗り、助修士たちを神に委ねた。そして途に就き、馬を駆ってペロン・マーリンに来たり、パラミデス卿が来るのを待った。

戦いの朝、起き上がろうとした時、パラミデス卿は酷い痛みを覚え、立っていることができなかった。自分がそのようになったのを見て、大きな怒りと嘆きに捕われた。「アア、神よ」と彼は言った、「まさにこの時に私の体がかくも衰れになるとは、一体何をお望みなのか。アア、トリスタン殿、そなたは私が臆病と勇気のなさのた

めにこの戦いを止めたと言うことができるだろう。アア、トリスタン殿。今私が、体の不調と、我らの戦いを別の日にしようと思知らせることができたなら。そして、神の助けのもとに、もしこの戦いができてそこで死んだならば、私は本当に幸せだろう。もし死ななかつたならば、私は次の日に死ぬことを望む。この戦いをすることができ、私が臆病ゆえに止めたとトリスタン卿が言うことができぬように」。お聞きになったこのように、パラミデス殿は絶望し、体に来た不調に妨げられて、ペロン・マーリンに行かぬままになった。

トリスタン卿は、長くそこに留まっていたが、パラミデス卿がやって来ないのを見て、ペロンに下り立った。しかし、頭に兜、脇に盾、槍と馬の手綱を手にしたままで、パラミデス卿が来た時に自分が無防備であることを望まなかった。お聞きになったこのようにして、トリスタン卿はパラミデス卿を待ったのだった。

<45> 彼がこうして待っていると、とそこへ、全ての武器でもよく武装した一人の騎士がやって来る。伴はなく、もの思いに頭を地面に傾げでやって来た。その騎士は誰ぞと誰かが問うならば、それは、冒険を求めて行くラックのランスロ卿だったと答えよう。トリスタン卿と出会ったことはなかった、が彼らはこの世で最大の友人だった。

彼が来るのを見て、トリスタン卿はパラミデス卿だとすぐに思い込む。直ちに馬にまたがり、槍を低く構え、馬に拍車をかけ、とても激しく彼に向かい、言う、「廷臣、私から身を守れ」。こう叫び、かくも激しく向かって来る騎士を見て、ランスロ卿は、知っている騎士かもしれないと心中で言った。が、何ら遅滞することはなかった、槍を低く構え、馬が近づくのが可能な限り互いに来たり、全力で激しく盾を突いたので、槍はどちらも粉々に飛び散った。槍が折れた後、盾と体で固く共にぶつかり合ったので、地面に転がり落ち、夜も昼もわからぬほどだった。長くそのままだったので、足も手も動かなかった。しばらく後、二人の騎士は共に立ち上がり、地面が自分の下で震えるかのごとくよろめきながら歩み、互いに放心した

ように相手を見つめた。いくらか力が戻ってくると、トリスタン卿は、何度もパラミデス卿と戦ったが、これほど激しく撃ち合ったことは決してなかった、と自らに言った。またランスロ卿は、初めて武器を手にして以来、これほど激しく攻撃した騎士はいなかったと言い、そして「真に最強の騎士だ」と言った。

気力と体力を取り戻すと、ぐずぐずすることはなかった、剣に手をかけ、盾を前に構え、互いに激しく剣を振りかざして真っすぐ相手に撃ちかかった。トリスタン卿が先にランスロ卿の下に身を投げ、腕の力で上から撃ったので、盾は外れたが、ランスロ卿はすぐそれを取り戻すことができた。重く最悪の激しい戦いが始まり、大きな打撃を加え合った。決して容赦することはなかった。で、何を言おうか。盾は粉々になり、鎖帷子はずたずたになり、何度も生身に剣を感じ、もはやそれ以上戦いを続ける力はなく、どちらも戦うよりは休む必要をもたない方はなかった。それゆえ、息と力を取り戻すために休むことが、しかたなく必要だった。で、互いに別れ、それぞれ盾にもたれかかった。

pour cordie. Enfant se dmet. Or
pal. con uiez Augz hor q remest. quil
ne ala du peron merlin por l'engo
bermant quil li unt dou cors. Et
Quant montaignier. C. ce demo
re une Gunt piece q il uoit que
Or pal. ne uenit il d'ironie four
le peron mes toures fois enoit lieu
me en tete q'leais d'ail q la l'ame
q le frein du cheuaus emain q'ent
tot entent quil ne uolait que q'it
Or pal. uenit quil le trouat desgar
me. Et entel manieres con il Augz
hor attendoit. Or T. Or pal. :

Quant il adenoit entel main
eres Dame et uas uenir uns
ch. Princes de toutes armes q trop bie
montes ne ne auoit nulle opaigne
quenoit mont pendant la cite en
cline par tie q se auant me deman
doit qui li ch. estoit q' diuie que
ce estoit. Or land. dou lac. qui li
loit querant auentures ne onques
ne troua uen. Or T. q estoient
li Brengnar Amis dou monde. Et
Quant mensingnor. C. le uoit
ue noir il q' de cor uoierment que
ce soit. Or pal. il monte tan tost
four son cheuaus il baissen les Gla
uiues q hure cheuaus desporon il
uait q'untz mont hardiement q li
dit ualuz. Enides uos de moi. Et q'it
Or land. uoit li ch. que ena les car
q que si seueueuement li uist. Nostre
il dit li ch. meures qui ne puet que
que li ch. ne le onist. il ne fue nul
deleam ent Augz li uient les Glaiues
baumes. q uient les un uer les autres

tant con li cheuaus porrent aler q se
treferent four lesais de toure leur
force si roidement quil font Andez les
Glaiues uoler en pieces. q Apres le
bligement des Glaiues il se tre uerrent
nt deais q de cors si durement en
semble quil se reporterent ala tie
ciel d'ornes quil ne sauoient ca esp
ir nuit ou jors q demorent. Ma tie
une Gunt piece quil ne remuent
pie ne main. Ades de pieces se lie
uent Andez li ch. q aloient chan
celant. Augz q' la tie se fremaist de
four eaus q remurent les uns les au
tres come homs espaontes. Et q'it
il furent auques retornes en leur po
air. Or T. dit bien. Alu moines
qui auoit mannes fois aproues. A
Or pal. mes nulle fois nolaioit en
q'it si durement q' il s'ait. Nostre
poinr. Et Or land. dit bien enq'it
four quer que puit q' il porte arme
p' uerement il ne meue ch. que si
Apresmont longuans con artu. A fait
q uerement est il uerement ch. Et
quante il furent reuient en poir q' en
force il ne font nul deleam ent. Nostre
mistrent main. Nostre q'it Gement
lesais deuant q'it les un par les au
tres mont hardiement lesper droite
one mont. Or T. Gement cor prime
remont four. Or land. q'it done de
haut. Ma force dou bras un il Gunt
cous quil liabat un Gunt chanrel
desnefais. Et Or land. li uent le
Guernidon tan tost. Alu cor en
cent la mellet dure q'it p'it q'it
q'it se se done uent Gunt coux. il



図4 戦うトリスタン（左）とランスロ（右）（Fr. 1463, f.18v）

<46> トリスタン卿は大いに驚き、パラミデス卿の中にこれほどまで大きな力と大きな能力を見たことは一度もなかったと心の中で言い、「神よ助け給え、彼が今の力の半分も持っているとはいかにしても思わなかった」と言った。ランスロ卿も、彼のことを全く同じように言った。彼がいったい誰なのか、この世で最大の驚きを抱き、この者ほど激しく強力な騎士と出会ったことはかつて一度もなかったと言い、「彼が誰なのか、私にはわからぬ」と言った。

息と力を取り戻すと、パラミデス卿だと固く思い込んでいたその者に対して大きな憎しみを抱いていたトリスタン卿は、まず剣に手をかけ、盾を前に構え、その騎士に向かって行った。彼が来るのを見て、ランスロ卿も遅れることはなかった。全く同じようにし、剣を手に彼に向かって行き、ライオンかレオポルドのごとく、互いに撃ちかかった。ひどく大きな打撃を加え合い、前よりもずっと激しい戦いを始め、剣は何度も血で濡れ、盾と兜は粉々になり、鎖帷子はずたずたになった。武器は全て酷い様になったので、去るときには役立たなかった。ご存じありたい、彼らが戦い合った所は血ですっかり紅く染まり、鎖帷子の編み物と盾の破片が散乱していたことを。で、何を言おうか。この一人ともう一人のしていることと、行なっている大きな攻撃と、続けている戦いを見た者は、彼ら二人はこの世で最高の騎士であると確かに言うことができたであろう。彼らは二回目の重く最悪の攻撃を続けた。彼らのどちらも、すっかり血に染まった 12 以上の切り傷を持たぬものはなかった。このようになってしまったので、大きく前に進めることはできず、剣はすっかり血に染まって紅かった。血に紅くなったトリスタン卿の剣を見たランスロ卿は、心の中で言った、「あれは私の血だ」。やはり紅くなったランスロ卿の剣を見たトリスタン卿も、全く同じことを言った。こうして二人とも、剣に見た血で大きな怒りを抱いた。互いにとても勇敢にまた激しく相手に撃ちかかった。そんな様だったので、彼らは血を失ってすっかり弱り、ほとんど立っていられなかった。そのため、どうしても息を取り戻す必要があり、互いに別れて行き、

持っていた盾にしばらく寄り掛かった。ランスロ卿は心の中で言った、「アイー、麗しき主なる神よ、助け給え。今日は私は悪くも愚弄された。私がかくも戦った相手は、人間ではなく悪魔だということがはっきり分かったのだから。あれがもし人間で、あれに対してしたように、酷く傷つけ撃ち付けたなら、私は何度も勝つだろうに、ところがあいつは、始めよりも後でよりよく湛えているのを見た。それゆえ麗しき父よ、あれが人間であろうと悪魔であろうと、私を助け給え、恥かしき死を遂げることのなきよう」。

<47> トリスタン卿は言った、「アア、童貞なる乙女、貴女の優しき御子に、私を助け、我が魂に憐みを持つよう祈り給え、体は潰え、最期の時を迎えたことがはっきりと分かるのだから。アイー、主なる神、私は何とパラミデス卿によって破滅させられたことか。彼がこれほどまで大きな力を持っているとは思わなかった。彼は常にとっても力強く、私の見るところ、戦いで常に優勢だった」。

休息して、少し力を取り戻すと、トリスタン卿が先に立ち上がって言った、「今や、行けるところまで行こう、我らの戦いを終わりまで遂げたいのだから」。大きな怒りでもって盾を脇に抱え、剣を真っ直ぐに構え、ランスロ卿に向かった。ランスロ卿は彼が向かってくるのを見ても、少しも怯んだ様子にはなかった。それどころか、剣に手を掛け、とても勇敢に彼に向かって行った。と、戦いを始める前に、ランスロ卿が言葉を取って言った、「貴殿、そなたが戦いを果てまで進めようと望んでおられることはよく承知した。そなたがそうしたいなら、我らの間で一つのことをしたいと望む。そなたはそなたの名を名乗り、私は私の名を名乗る。そなたが私を最期か死に追いやるならば、そなたが誰を殺したかわかるように、また私もそなたに同じことができるように」。

トリスタン卿は、ランスロ卿が話すのを聞いて、彼が自分がそう考えていた者ではないことがすぐ分かった。「何と」と彼は言った、「そなたは我が敵パラミデス卿ではないのか」。「そうではない」と彼は言った、「とくにご存じありたい」。「ならば、誰方なりしや」と

トリスタン卿は言った。「貴殿」とランスロ卿は言った、「もしそなたが、私が名を名乗った後、そなたも名を名乗ると約束なさるならば、すぐにもそれを言おう」。トリスタン卿は彼に言った、「貴殿、もちろん約束する」。「さあ、ご存じありたい」と騎士は言った、「私はラックのランスロと呼ばれる、私のことが話されるのをかつてお聞きになったかは知らぬが」。トリスタン卿は、それがランスロ卿、世界で自分が一番愛した人間、であることが分かると、すぐに盾を地に投げ、彼の前に跪き、剣を差し出して言った、「貴殿、私の剣をお取りくだされ、私が敗北したと認めます」。ランスロ卿は、騎士の善良さを理解し、見て言った、「貴殿、立ってください、私が敗北したのでありそなたではないのだから、そなたが誰なのか私に言って下さりませぬか」。「騎士殿、麗しき甘き友」と彼は言った、私はレオノワのトリスタン、そなたの騎士にして親しき友」。

<48> 彼がレオノワのトリスタン卿、友、であることが分かると、ランスロ卿はすぐ、トリスタン卿がしたのと同じようにした。直ちに盾を地に投げ捨て、同じように跪き、自分の剣を差し出して言った、「殿、私の剣をお取りくだされ、私が敗けたのだから、貴方と戦ったことをお許し下さるよう慈悲を乞いまする」。「アア、ランスロ卿」とトリスタン卿は言った、「私より相応しい貴方こそ、私のを取ってください、貴方は戦いで常に優勢だったのだから」。「アイー、殿」とランスロ卿は言った、「言い給うな、そなたこそ戦いとすべてのことの榮譽を手にすべきなのだから」。二人は、互いにしきりと戦いの榮譽を譲り合ったが、どちらも取ろうとしなかった。兜を脱ぎ、立ち上がり、抱き合って何度も接吻した。互いに、大きな喜びと大きな幸せを交わした。

長く喜びを交わした時、トリスタン卿が言った、「殿、さあ馬に乗ってどこか宿に行き、傷と痛みを治療させましょうぞ」。「殿」とランスロ卿は言った、「御意に」。で、近くにいた馬を探しに行き、それにまたがって歩み始めた。馬を進めて、トリスタン卿が出発した朝いた修道院に遣って来、そこで馬を降りた。ひどい様になったト

リスタン卿を見て、助修士たちは怒りを覚え、彼らを部屋に案内し、武具を解き、どちらも 12 以上の大きく深い傷を負っているのを見た。その技に通じた修士の一人が、彼らの傷を診、とてもよく洗って包帯をし、死の心配はないこと、ひと月以内にすっかり良くなるだろうと言った。

お聞きになったようにして、ランスロ卿とトリスタン卿は初めて出会い、知り合ったのだった。修道院に来てのち、そこにひと月も留まった。そして、互いに大いに喜びと幸せを交わし、互いの人生について大いに尋ね、ペロン・マーリンで行った大きな戦いのことを話して楽しんだ。トリスタン卿は、その戦いの理由を全て一つ一つ彼に話した。どのようにして彼とパラミデス卿との間に戦いが生じたか、どのようにパラミデス卿を待っていたか。「殿」とランスロ卿は言った、「聖なる十字のおかげで、危うく私はそなたとパラミデス卿との間の憎しみを高く買うところだったが、幸いにもそうならなかった」。修道院にいる間、彼らは大いに楽しく喜びと慰みのうちに長く過ごした。すっかり治ると、ランスロ卿は言った、「殿、アルトゥ王とジネヴル王妃様に会いに来てくださるようお願いする」。「殿、御意に」とトリスタン卿は言った。

[中略]

<236> いまや私は、本書を書き終えるのに大いに仕事してきた。智と力を私に与えたもうた神のお陰で、長く携わり長く働き、それを成し遂げた。私は、できうるかぎり美しく楽しく快い話を込めた。そこにある麗しいもののために、イギリスのヘンリー王は、隅から隅まで目を通し、今も何度もそこに感ずる大いなる喜びゆえに読んでいる。しかし彼はラテン語の書に、本書の訳者がしたのよりもずっと多くのまだフランス語に訳されていないものを見出し、彼は私に、自分と他の者たちとともに文字と口頭でもって——本書にはまだ多くのことが欠けており、今から付け加えることは不可能だから——私がもう一度別の書を書くことに取り掛かり、ここになんかことが全て含まれることを求め願った。そして、彼の願いと命令に決して逆らおうとせぬ私は、本書の終わりで主君に約束する、この冬の寒さが過ぎ去り、/106ra/ 四月の期という快い季節が始まったなら、本書の大仕事のあと少し休んだならば、それは一年掛かり、全ての騎士道と楽しみをすっかり諦めたのだが、ラテン語の本とフランス語で書かれている他の本に再び取り掛かるであろう。

そして私は隅から隅まで見つめ、欠けていることが分かったもの、ラテン語の書に見出すものから一冊の書を作り、そこにはもし神の氣に召すならば、リュス・ドル・ゴ、彼は最初に訳し始めた、ゴージェ・マッパ師、彼はランスロについての自分の本を書いた、ルベール・ド・ボロン殿、そしてエリー・ド・ボロンと呼ばれる私自身によって完成された全ての話を、私は編むだろう、もし神が、私がその書を完成する力を与え給うなら。そして私は、私の書を褒め給うたこと、このように大きな褒美を下さったことに、我が君主ヘンリー王に大いに感謝申し上げる。

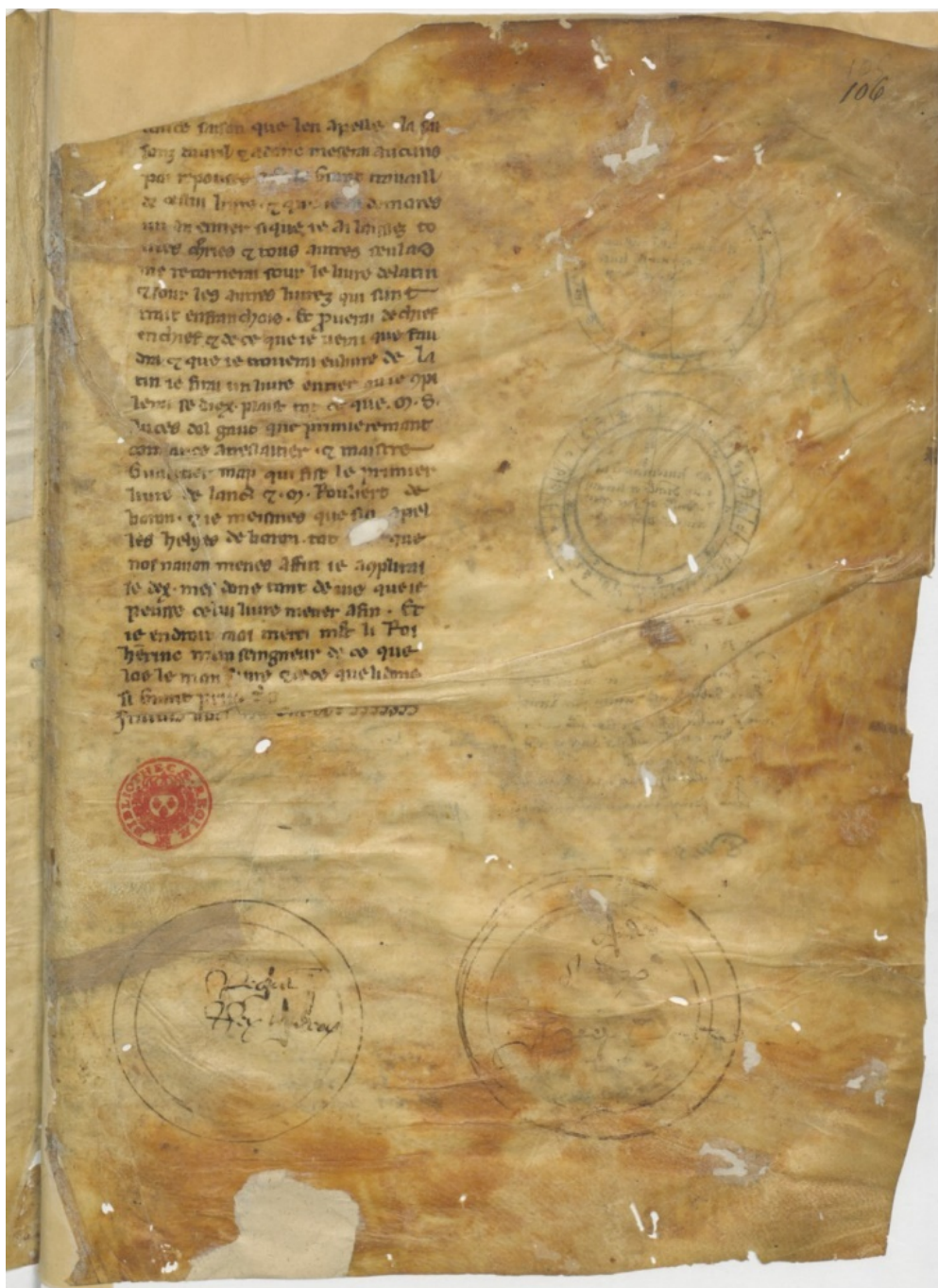


図6 Fr.1463, f.106r (最後のページ)

1) *Il Romanzo Arturiano di Rustichello da Pisa*, a cura di Fabrizio Cigni, Pisa Pacini 1994。当該箇所：写本 BNF Fr.1463, ff.1r, 16r-20r, 105v-106r, フランス語校訂版 pp.233, 242-5, 297, イタリア語訳 pp.298, 307-10, 362。イタリック体は作者の口上（和訳者による）。拙著『マルコ・ポーロとルスティケッロ ― 物語「世界の記」を読む』近代文藝社 2016, pp.687-701 より転載。

図7 騎士たちの戦い (f.69v)

